

張 文朝（中国哲学史専修）

江戸時代における朱子『詩集伝』の受容に関する研究

論文審査結果の要旨

本論文は、江戸時代における朱子『詩集伝』の受容に関して、代表的な学者の所説を取り上げ具体的に分析することによって、解明を行ったものである。

序論では、「詩経学」の基本問題と先行研究を整理した上で、『詩集伝』をめぐる議論の中で、「詩序問題」、「人情説」、「二南問題」、「淫詩説」、「詩教説」、「六義問題」の6点が重要な論点であると提示して、本論文の研究目的と研究方法を明らかにしている。

第一章では、『詩集伝』の成立とその特色、並びに後世への影響について論じている。

第二章から第六章までが本論文の中心をなすが、江戸時代の儒学者について、便宜的に5つの学派に分け、9人の学者の『詩集伝』に対する評価や批判などについて論じている。

第二章では、新注学派の藤原惺窩、山崎闇斎、中村惕斎を、第三章では、古注学派の中井履軒を、第四章では、古学派の山鹿素行、伊藤仁斎、荻生徂徠を、第五章では、考証学派の大田錦城を、第六章では、陽明学派の中江藤樹をそれぞれに取り上げ、詳細な分析を行っている。

中国における「詩経学」研究の蓄積と伝統は言うまでもないが、日本における「詩経学」に関しても個別の研究は行われてきたが、近世において特に大きな影響を与えた『詩集伝』をどのように受容し、評価又は批判を行ったかということに関するまとまった研究は、従来殆ど行われなかったと言える。本論文は江戸時代における『詩集伝』の受容に関する本格的な研究として高く評価することができる。本論で個別の学者の『詩集伝』観を分析しているが、その際に如上の6つの論点がどのように議論されているかを見ることによって、取り上げた学者相互における異同を明らかにすることができており、単なる羅列に終わっていない点も評価できる。個別の分析を通して得られた新知見を、以下に幾つか挙げる。

藤原惺窩については、従来訓点や音韻に関してのみ取り上げられてきたが、本論では、『詩経』に対する見方がほぼ朱子の『詩集伝』に従っていることを具体的に立証した。中井履軒については、従来朱子の観点に従ったと論じられてきたが、本論文は履軒が朱子の『詩集伝』に対して批判的な態度を取っていたことを論証した。また、山鹿素行や中江藤樹については、逆に『詩集伝』の影響を受けていることが明らかになった。さらに、伊藤仁斎の「人情説」に関しても、本論では仁斎が個別の性情と普遍の人情との意味を区別していることを明快に論証した。

そして、論者は江戸時代の学者において、いかに古注・新注双方の学識が含有されていたか、そこに江戸の「詩経学」の特質があるということを結論として提示している。

『詩集伝』受容のあり方や評価が中国のそれとどのような関係にあるのか、個別の学者の『詩集伝』観が各自の学問や思想全体の中でどのような位置づけと意味を持つのかなど、今後解明すべき問題も残っているが、本論文は江戸時代における『詩集伝』の受容に関する研究を従来より一歩進めたものとして十分に評価することができる。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。